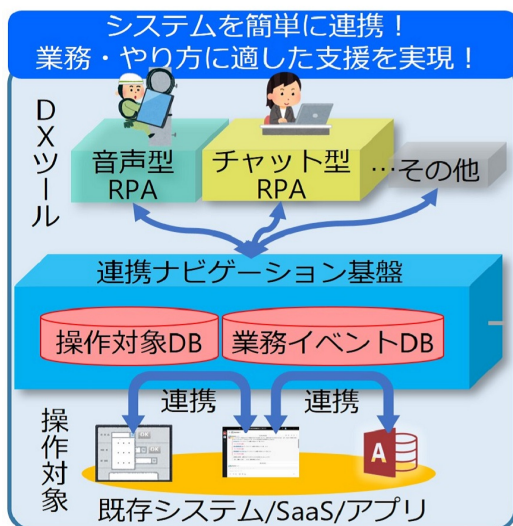


背景

IOWN構想では企業がさまざまな業務システムを連携させ、ビジネスを創出します。多くのシステムや業務の対応には、作業員への業務や「やり方」に適したDXツールによる支援が不可欠です。しかし、システム改修やDXツールの作成コストが大きいいため、実現が困難です。

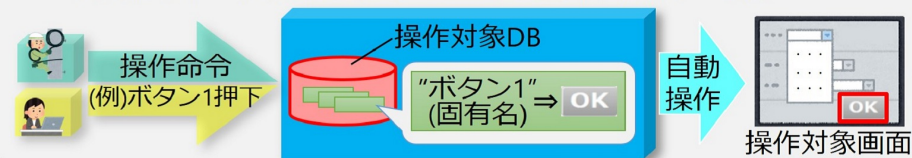
成果の概要

本基盤はシステム画面の差異を吸収し、操作対象（ボタンなど）への自動操作や、作業員が実施した操作内容（業務状況）を検出する機能を汎用・共通的に実装しています。DXツールから呼び出すことで、システム改修なしに各作業員の業務に適したガイドが手軽に実現できます。



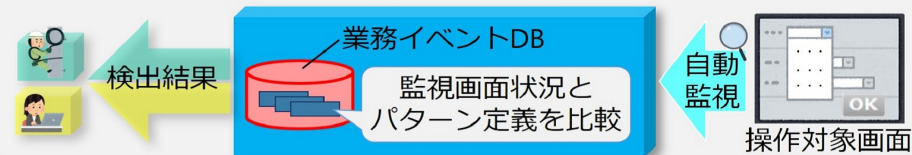
機能①操作対象抽象化機能：

「操作対象」に固有名を付与し、一元的な自動操作が可能



機能②業務状況抽象化機能：

「業務状況」をパターン定義し、リアルタイムな検出が可能



技術のポイント

- システム画面の操作対象を特定する情報に一意的な名称を付与・管理し、実行時にはこの名称に基づき、DXツール本体からの命令によって代行にて一元的な自動操作
- 業務状況に対して、一元的なルールによるパターン定義をすることで、それらパターンにマッチした状況をリアルタイムに検出可能

この研究がもたらす未来

システムに対する自動操作や状況検出の機能の利用により、作業員の業務や「やり方」に適したDXツールを作成でき、多様なシステム間の連携が可能になります。

出展企業

日本電信電話株式会社

問い合わせ先

rdforum-exhibition@ml.ntt.com